

高齢者雇用に効果あり 良い会社をつくる力になる

私たち加藤製作所は、順送りプレス加工や絞り加工を強みに、家電製品の部品や自動車部品などを作っています。国内で頑張っている多くの中小製造業がそうであるように、私たちも2008年のリーマン・ショック以降は、発注メーカーに対して付加価値の高い部品作りを提案しつつ、仕事の量は少なくとも高収益を目指すという生き残り策を進めています。いわゆるバリュー・エンジニアリングです。なんとか仕事を確保するため、発注側の開発設計担当者さんらとコネをつくるべく、製造業同士が出会えるネットサービスを活用したりもしています。

これらに加えて、積極的に取り組んでいるのが高齢者雇用なんです。弊社の100人の従業員のうち、50人が60歳以上です。継続雇用だけでなく、地域の未経験者も受け入れています。2002年から始めた弊社のこの取り組みはユニークなようで、たくさん取材を受けました。この4月からは高齢者雇用安定法が改正され、たくさんの企業経営者が頭を悩ましておられるのかもしれません。そのためか、温めていた企画をまとめた著書を3月に出すことができました。『意欲のある人、求めます。ただし60歳以上』（PHP研究所）がそれです。

会社の未来を切り開いていくのはやはり若手ですが、基礎から会社を支えてくれるのは高齢者だと感じています。意外な力があります。園芸が得意で、工場にある植木を率先して剪定してくれたり、ボラ

ンティアで賞を取るような人がいたりするんです。若手に、人の常識、縁の大切さ、地元の習慣などをアドバイスしてくれます。長年務めていて技術指導ができる人材は当然ですが、そうでなくても、豊かな人生経験をベースに、見過ごしてしまいがちですが、気を遣えば会社を良くすることができるような場面で活躍してもらっています。現場では彼らが高齢者だという認識もありません。同じ仲間です。

会社は、人や地域が一緒になって幸せになるために存在する、と考えています。実は、弊社の高齢者雇用は、景気の良かった頃に、土日も工場を稼働させるために始めたことでした。しかし今では、高齢者雇用自体が会社の理念に合致し、弊社の生き残りにも直結していると思っています。おかげさまで今年創業125年を迎えることができました。

より良い高齢者雇用に必要なことは何かと問われれば、明朗で、人間万事塞翁が馬と心得ていて、何が幸せかを自身で決められる人を雇うことでしょうか。これらは、その人の雰囲気や人相に表れていますから、採用面接の時に分かると思います。大企業などですと、仕事と対価を比べて高齢者としての働き方を見いだせない人も多いと聞きます。高齢者の仕事は、働き盛りの人の基準では測れないと思います。私も、高齢の従業員から生きることと仕事についてたくさん教えてもらいました。仕事をしていると、人は生き生きしてくるということ。勤勉な日本人にとって仕事はかけがえのないものだということ。

高齢の従業員が、作業中に冷たすぎる水に触れないようにするといった環境整備をするなど、高齢者にも若手にも、仕事をするためのふさわしい場を用意することが私の仕事だと思っています。また、その投資ができる儲けを出すことも私の仕事です。

(談)

加藤 景司(かとう・けいじ)氏
1961年岐阜県中津川市生まれ。愛知工業大学卒業後、3社を経て加藤製作所(岐阜県中津川市、売上高約17億円。グループ会社に加藤鉄工など)入社。2004年から現職。明治時代に農具製作の鍛冶屋を始めた創業者から数えて四代目。正月には、創業者が始めた御神刀の製作を執り行い、社内にある社に奉納する。子供の頃から毎年この行事を見ていて、いつかは自分がするのだと、事業承継も自然だったという。

